2026 年 11 月 8 日

―日々死を身近に感じつつ、精一杯生きることを考える―　天羽浩一

近年の身心・身辺状況　ここ 2～3 年、身体機能の弱体化（サルコペニア⇒フレイル）が進行

> 夜間頻尿と不眠、足の痺れと浮腫み(原因不明)、強度の便秘と直腸粘膜脱症候群による痛みと不快感、膵管内乳頭粘液性腫瘍（IPMN)、B 型慢性肝炎、三尖弁閉鎖不全症、排尿障害、腹水滞留、腰・膝・首の痛み(脊柱管狭窄症・変形性膝関節症・頚椎症)等々、

そして今年 1 月に「**びまん性大細胞型 B 細胞リンパ腫（DLBCL)**」と診断され、左肺上葉結節も指摘され、さらに腹部の腫瘍組織検査後に重篤な**術後小腸イレウス（腸閉塞）**を発症、開腹手術や小腸イレウス管挿入法、及び DLBCL 抗癌治療で 3 度の手術を含め、6 度の入院を繰返しました。
その間に考え、感じたたことは

1. **死をすぐ間近に感じることを幾度か体験し、最後の苦行と自覚、死ぬまで修行と忍・諦。**
2. **死ぬまでにしておかなければならないことは何か、整理し実行していきました。**
3. **以前から生涯ソーシャルワーカーとして働くことを目標にしていましたが、利用者への不利益が生じることが予測され、すべての仕事（対価を得る仕事＝労働市場）から退場しました。**
4. **死を覚悟し、受け入れることが出来るようになりました。QOL が確保され、穏やかに死ねることが最善ですが、死に方まではコントロールできないのが残念です。**

老化ということ・・・

人の心身は皮袋のようです。この皮袋は吸入口だけでなく排出口もついています。皮袋の中は骨や蛋白質や血液やらがねっとりと混じった粘液です。時間が経つとともに、皺や傷が至る所について、ところどころ中から粘液が滲んできます。時折少し吹き出したりするので、ガムテープやクリップで止めて応急措置をとり大破を回避しますが、そのうちにあちこちから小噴火が始まり、手の付けようがなく、心不全とか多臓器不全とか、言い換えれば老衰という名で終末を迎えます。数十年前、新しい新鮮な皮袋でしたが、今では皮は黒ずみ、汚れ、皺にまみれ、汚れた粘液が滲んでいます。**新しい革袋がよれよれの皺だらけの革袋に変化していきます。古い皮袋には新しい酒は入れられないのです。**





死ぬということ・・・

老化とは、**酸化する**こと、すなわち**錆びる**こと、身体の内部で大小の**炎症が発生している**ことを指しています。人間は生きるために酸素を吸入することが必須ですが、酸素は生命体に攻撃を加え損傷を与える毒物質でもあります。この二重基準を生きなければならない宿命であるがゆえに老化、そして死を免れることはできません。どこかの時点で静かに死を受け入れる準備が必要です。

> 80 歳になった頃、心情としては「もういいか」とも思っていましたが、実際に「天羽さん今日ですよ、いいですね」と死神さんから連絡があれば、「エッ、今日ですか？」「いや、ちょっと今日は。も、も、も、もう少し待ってもらえませんか」と頼み込んでいたでしょう。「それでは明後日にしましょうか。」「エッ明後日？せ、せ、せめて数週間待ってもらえませんか。」何とも未練で無様な応対しかできそうもありません。いつでもいいと言いつつ、いざとなると後ろ髪を引かれる思い、あるいは未練が残る。それらの思いは何ら実体のないもので、たとえ数週間待ったからといってその日が来ればやはり何とか逃れようとするのだろうと思います。

悟りの境地とはこの＜せめて数日、いや数週間＞という未練をさっぱりと断ち切って旅立てる境地のことを指していると思います。せめて数日、数週間という未練と妄執が人を苦しめるのであって、せめて数日、数週間は「苦」でしかないと悟り、今旅立つことこそ‹苦›から離れることであると会得できればということです。　**諸行無常・諸法無我・涅槃寂静・一切皆苦**

> 「行く川の流れは絶えずして、しかも、元の水にあらず。淀みに浮かぶうたかたは、かつ消え、かつ結びて、久しくとどまりたるためしなし　世の中にある、人と栖（すみか）と、またかくのごとし（略）**朝に死に、夕べに生まるる慣らひ、ただ水の泡にぞ似たりける。**知らず生まれ死ぬる人、いづ方より来りて、いづ方へか去る。(方丈記)」
>
> 「祇園精舎の鐘の声、**諸行無常**の響きあり。沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらはす。**おごれる人も久しからず、ただ春の夜の夢のごとし。たけき者も遂にはほろびぬ、ひとえに風の前の塵に同じ。**(平家物語)」

幸いにして今は明日お迎えが来ても「分かりました」と静かに応答する覚悟ができるようになりました。抗癌剤治療で髪の毛が抜けたのを機会に、坊主頭にしたので、後ろ髪を引かれることはありません？㊎？

葬式について考えました

「我れ眼を閉じなば、賀茂川に捨てて魚（いお）に与ふべし」親鸞聖人の言葉を覚如上人が記した言葉です。「死体は抜け殻にすぎない、墓や葬式などは不要である。生前に殺生してきた身として死後はせめて魚に餌としてお返したい。」という主旨で「私が死んだら、鴨川に住む魚の餌にしてほしい」という意味です。

愚禿親鸞には儀式や形式はふさわしくないという想いが溢れていますが、おそらくは当時、病死者や餓死者、産れたばかりの赤子が鴨川を流れていくことは珍しくなかったことでしょう。

> 私のお別れ会（葬式）については無宗教、戒名なし、祭壇なし、花輪、香典一切なし、通夜式、告別式なし、〇〇の儀とかいう儀式は一切不要。喪服ではなく平服着用という個人的流儀による葬儀形態を遺族となる方にお願いしました。葬儀は故人のものではなく、残された者に属するのでしょうが、勝手ですが当人の心情として配慮をお願いしました。個人的には直葬で充分という想いもありますが、最後までエゴを通すのも憚られ、近しい親族のみのお別れ会―死をフレンドリーに語り合う会―として考えました。

人は死ねば、炭素や、水素、窒素、酸素などの元素、あるいは分子化合物として空中に、あるいは地中に散布され雲散霧消する。**墓の中にも、千の風の中にも私はいない。**残るとすれば私を知っている人々の**記憶の中**だけである。私があなたの記憶の片隅に棲み続ける限りはそこに私は存在するということです。

my 仏陀　人間仏陀についての得手勝手な解釈　キーワードは「苦」

いよいよこれからが本題です。**my 仏陀**とは私なりの仏陀の教えを**得手勝手に解釈**したものです。仏陀は仏教の開祖でもなければ、超人でもない。おそらくは当時隆盛を誇ったバラモン教徒の一人であり、しかし目前のバラモンの特権的で理不尽な現実に失望し、人々が平等であるという信念のもとに、ただただ人の生きる意味をひたすら求め続けた哲人であり行（おこない）の人であっただろうと思います。

仏陀の教えは現世をどのように生きるのかという人道にあって、地獄や極楽、輪廻転生などという禍禍しいものとは全く無関係です。答えのない悩みと葛藤を抱えながら、一個の人間として生きる道を模索し続けた実践者でありました。

29 歳で出家し、35 歳まで 6 年間、身体の限界値までの苦行を課したようですが、そのころはバラモンから外れ、ジャイナ教徒の一員であったのだろうと思います。

my 仏陀はこのように仰せになった。「人が生きるということは苦を生きるということです。生れ出て死ぬまで修行が続きます。死ねば修行が終わり、涅槃が訪れます。」

「人はただ生れて生きて、病になり老いて死んでいくもので、ただそれだけの存在です。生まれる前にも死んだ後にも何もありません。ただ因縁のみがあっただけで、地獄も極楽も、輪廻もありません。生まれたこと、生きることに特別の意味があるわけではありません。」「形あるものは消滅し、すべては過ぎ去っていきます。」

しかし、生命の存在それ自体は人知を超えた天文学的な超偶然によって生じたものであり、**諸行無常とはいえ、あるいは諸行無常であればこそ、人は決して取替のきかない絶対的な存在**でもあります。そうであるが故に**一つ一つの命に意味があり、存在するだけで価値がある**こと、

その存在には存在するだけで**比類なき絶対的価値**があります。**絶対矛盾による逆転**です。

受苦的存在であること

人は自然（物質）の一部でありながら、意識を有してしまったが故に自然と切り離され、**受苦的存在**として生きていかざるをえません。生きている間は病いや老い、人的社会的環境的諸関係による苦行が試されている存在であると思います。しかし**受苦的存在とは対象に働きかける情熱的存在でもある**ということです。苦行のなかにも、人としての歓びや躍動の時があり、生命自体が奇跡でもあります。その奇跡的な偶然が生み出した**瞬時を生きる私たち**がどのように生きればいいのか、ひたすらの修行者であった仏陀が生涯をとおして得た悟り（覚り）は、ごくごく平凡なそして誰にでも理解できるのものであったと思います。仏陀は信仰ではなく日常の生きる術を伝えてくれたのです。「諸々の悪をなすことなく、己のできる善をなす。心を込めて。それが私が到達した悟りなのです」そう言って仏陀は静かにほほ笑んだのです。それが色であり、即空であるということです。　＜色即是空空即是色＞

若いころ苦行に耐えた仏陀は苦行に別れを告げ、村娘スジャータの差し出した一椀の乳粥（ちちがゆ）に平安を見出した時、はじめて悟り（覚り）に近づいたのです。仏陀は苦行に別れを告げた 35 歳の時、菩提樹の下で悟った（覚った）とされていますが、それは解脱を果した偉人として約束されたわけではありません。仏陀はその後も生涯を通して、ひとりの人間として、受苦的存在としてたゆまぬ精進、修行を続けたことと思います。



諸悪莫作 衆 善奉行 自 浄其意是 諸 仏 教　（七仏通誡偈）
（しょあくまくさしゅうぜんぶぎょうじじょう ご い ぜ しょぶっきょう　しちぶつつうかいげ）

人間は受苦的存在であること、
欲望の統制（吾れ唯、足るを知る）が不可欠であること、
戦争を世界から葬り去ることが人類共通の使命であること
しかし、欲望の妄想と妄執に憑りつかれたホモ・サピエンスに可能なことなのかどうかは誰にも分からない・・・ただただ歩みを続けるのみである。

現状で到達した価値観について

□私が 81 年の生涯を通して最終的に得た価値観、悟りは**「戦争をしない・させない、平和・いのちと人権」**です。**宗教や人種、性や年齢や民族、国家を越えて、互いの存在の多様性と尊厳を尊重する**ということです。**ホモ・サピエンスの使命**であると認識しています。

（注）なお、「いのちと人権」は、**動植物の存在価値と人権という人間中心のエゴイズムとの葛藤が内包された命題**であることを示しています。すなわち食物連鎖の頂点に立ち、しかも自然界や動植物へのお返しをすることなく君臨する人類は常に、自然界との矛盾（動植物の命と人権との間に存在する矛盾と緊張）と流動の中に存在していると思います。生成と消滅、更には**動的平衡**がバランスを保ちながらかろうじてこの世界が成り立っているものだと感じています。

欲望と妄執に憑りつかれた資本主義体制のなかに投げ込まれたホモ・サピエンスが、そこから抜け出す道は今のところ塞がれたままです。しかし使命を果たす意思と行動こそが欲望と妄執の罠から抜け出す道であるだろうと思っています。

「朝焼小焼けだ 大漁だ 大羽鰛（おおばいわし）の 大漁だ。浜はまつりの ようだけど 海のなかでは 鰛のとむらい するだろう」（金子みすゞ）

（注）ホモサピエンスがネアンデルタール人やデニソワ人その他多くの人類を滅亡させてきたという従来の人類学的解釈に対して、ホモ・サピエンスがネアンデルタール人、デニソワ人等の遺伝子を有していることが判明し、統合説・吸収説が有力になっています。しかし婚姻や人口差による統合あるいは吸収があったとしても、そこに救いがたい暴力があったのではないかということは、容易に想像することができます。
またホモ・サピエンスのみが生き残った要因として、血縁・地縁の共同性、協働性、共感性の優位性があげられますが、このことが他の共同体への排他的排除的暴力的行動に直結していくことも容易に想定されます。とはいえ、たとえホモ・サピエンスに暴力・殺戮の遺伝子が埋め込まれていようと、**現代に生きるホモ・サピエンスにとって「戦争を終わらせること」は自らの歴史的使命と言えると思います。**

辞世句

「願わくは　朝陽を浴びて　初夏死なむ　光る緑の　息吹の中で」

本歌は言うまでもなく西行法師「願わくは　花の下にて　春死なむ　その如月の　望月のころ」であります。

既に今年の５月は過ぎ去りましたが、来年 2027 年の５月なら了とすべしです。

（附記）

人間イエスとの比較

□ 人間仏陀と同様、人間イエスにも強い関心があります。イエスは仏陀と異なり貧しい大工の子として育ちますが、ナザレの貧しい生活の中でユダヤ教やローマの権力の横暴に満身の怒りを持ち、変革を志す社会革命家として育っていきます。徹底的に貧しく社会的に疎外された者た

ちへの共感をばねに、ユダヤ教の既得権益者や、彼らの背後に君臨するローマの政治権力とも対峙していきます。当時の腐敗したユダヤ教への反旗、それはユダヤ教そのものというより、ローマの権力を背景に特権をむさぼる者たちへの怒りが出発点でした。

イエスは仏陀とは異なり、**反権力的人道主義、社会革命思想**の持主であったことは仏陀との大きな相違点であったと言えます。常にマイノリティの立場に立ち、生命を賭して権力と闘い続けました。最終的に「エリ エリ レマ サバクタニ **わが神よ わが神よ 何故私をお見捨てになられたのですか**」と絶望の絶叫の中で十字架に撃ちつけられ亡くなりました。30 代だったと言われています。宗教権力と政治権力に徹底的に対峙し続けたイエスの姿勢には正義感と、ほとばしる情熱を感じ取ることが出来ます。

それに比して仏陀の場合、当時のインド諸国家の権力との緊張関係、あるいは疎外されている人々への強い共感をばねに社会の矛盾に切り込むという思想はなく、むしろ権力者や富者の庇護を受けて修行を続けていくという限界が亡くなるまで続いていました。仏陀の教えは権力と緊張関係を持つことを嫌い、ひたすら個人の内面における修行に価値を置いていたという限界を感じざるをえません。仏陀は亡くなるまでいわば平和に修行を続けて死んでいきました。争いを好まなかった平和主義者ではあるが、結局のところ社会に存在する激しい矛盾と対峙することはありませんでした。社会とは隔絶し、自己の内面にエネルギーを集中し、政治的社会的矛盾から発生する苦痛をも内面化し、生きることの苦痛を内面での修行をとおし消化＝昇華しようと試みたのだと思います。

仏陀は、80 歳で入滅するまで、国家や権力に弾圧されるということはありませんでした。むしろ国王や富者の庇護のもと歩き続けることが出来た人生でした。その意味で、仏陀が本当に被差別者・マイノリティの立場に立てたのかどうか疑問も残るところですが、仏陀は社会や政治権力には無関心で、**心の裡の革命・絶対平和**を悟り（覚り）として生きたものと思います。

80 歳で死んだ仏陀と 30 代で十字架にかかったイエスの人生総体の背景と生き方に大きな相違がありました。6 年間にわたる苦行を課した若い仏陀には悟り（覚り）を求める激しい情熱があったと思えますが、苦行を離れ、菩提樹の下で静かに禅定する道を選んだ仏陀と、残酷な拷問の果てに若くして死ななければならなかったイエスとは人生の道は異ならざるをえなかったと言えます。

またイエスは唯一神・絶対神の軛（くびき）の中に留めおかれました。一方、超自然的神ではなく、多神教社会に住み続けた仏陀には一神教とは価値を画する相対性が核心にあったと思います。

私は **my 仏陀**の生き方の中に、被差別人民とともに声をあげ、政治的社会的正義を求める実践的革命思想を吹き込みたいものと願望、妄想しています。

仏陀にあっては政治的社会的正義を求めること自体が空であり、諸行無常ということになるのでしょうが、仏陀の慈悲は禅定の世界だけでなく、極貧の中で差別され続ける人々とともに歩む実践的関わりの中でこそ生かされるものではと感じるのです。諸行無常であるにもかかわらず、諸行無常であればこそ、社会矛盾に果敢に挑んでいくことこそが実践的「慈悲」ではないかと思うのです。

人間仏陀へのアプローチ、人の子イエスへのアプローチは死後に付け加わった、奇跡や超人的能力

等の偉人化、神格化を廃し、人間としての仏陀、人間としてのイエスを明らかにしようということですが、仏陀やイエスの神格化のベールをはぐ作業が、あらたな神話化を生んでいるという批判もあります。2500 年前のインド、2000 年前のパレスチナ、環境としての自然やバラモン教、ユダヤ教等の背景を考えたとき、仏陀、イエスの実像を明らかにしようという意図とは裏腹に研究者・宗教者自身の仏陀やイエスに仮託する人格の卓越性、人権や反戦、平和や命の尊厳、平等など現代的価値観による反映がなされているのではないかという批判です。もっともな批判だと思います。

仏陀やイエスの歴史的事実は分からないことの方が多いと言えます。そんな中でも古代文献や考古学的調査で人間仏陀に迫ろうとする研究は進んでいますが、どこまで行っても、それぞれの研究者・宗教者の主観的価値観に左右されざるをえません。

いくら考古学が発展し、文献学が新たな発見をしていったとしても 2000 年以上前のインドまたパレスチナがどういう世界であったのか、そこで仏陀やイエスがどういう言葉を発したのか、証明できる材料は誰も持ち合わせてはいません。したがってそれぞれの研究者・宗教者の価値観によって仏陀やイエスの原像が異なってくるのは当然のことだと思います。

私は専門家でも何でもないので、より真実に近づくためにということではなく、あくまでも **my 仏陀、my イエス**ということで**得手勝手な人物像**をイメージしているにすぎませんが、私個人の思いなのでそれでいいと考えています。素人の私が 2500 年前の仏陀、2000 年前のイエスに現代的人格としての主観的理想像を投影することも許されるのではと思っています。

また吉本隆明が「マチウ書試論」や「宮沢賢治」「最後の親鸞」論などで展開している、人格の神格化を通してそこに拝跪していくことの無効性、危険性を厳しく問うていることについても納得ができます。吉本にとってすぐれた人格などいうのは噴飯ものだということです。あるのは世間であり、大衆であり、人々はその関係性の中で生き、生活しているのだということだということです。そのとおりだと思います。しかし私自身の生きる道標として、**my 仏陀 my イエス**を想起することは決して無意味であるとは思えません。**仏陀やイエスへの帰依や拝跪ではなく、疑問や批判を内包しながら、自分なりの my 仏陀、my イエスの原像に接近していきたい**と思っています。

仏陀もイエスも確かにこの世に存在した。しかし何を伝え、何をしたのか、具体的な事柄は不明です。ただ人間であり、且つ抜きん出た人格者であったことは間違いない。仏陀入滅後、イエス磔刑のあと、多くの人々が物語を紡いできました。仏陀は、イエスはこう語った、こう伝えたと。それぞれの物語にリアリティがあり、それぞれが **my 仏陀 my イエス**を求めてのことだった。大乗仏教も、上座部仏教も、原始仏教も、カトリックもプロテスタントも、原始キリスト教も、そのそれぞれが仏陀やイエスをモデルに時代時代を反映した願望、理想化した姿を描いたのだと思います。

奈良仏教、天台真言、また鎌倉仏教もそれぞれの時代に即した新興宗教であったと言えると思います。私の **my 仏陀 my イエス**もまたその延長線上にあると思います。私なりの勝手な妄想を貼り付けて**人間仏陀、人間イエス**を理解しているということです。

（注）私なりの勝手な妄想としての**人間仏陀 my 仏陀、人間イエス my イエス**は決して**帰依や信仰の対象**ではありません。死を身近に感じている人間にとって、残された生を如何に全うするか、生身の仏陀、生身のイエスを生き方の師匠・モデルとして、その一端を受けとりたいと思っています。
しかし、その教えは大きな信仰の物語としてではなく、残された日々の暮らしを通して生きていく道を探るものです。残された日々の暮らしで大切にしているもののひとつがが QOL の確保です。したがって**気持ちよく起きて、食べて、排泄して、寝るということです。更に広々とした温泉に入り、生ビールが飲めれば QOL100%達成というのも大切な本音です。スジャータの乳粥が必要です。**

（注）2500 年前のインド、2000 年前のパレスチナ、その同じ頃の中国は春秋戦国時代と名付けられ、百家争鳴の時代と言われました。また仏陀の時代、インドでも百家争鳴の時代でした。インドにおける百家争鳴は人が生きることの哲学的探求が中心でしたが、中国では国家論及びそれをめぐる人倫論が中心でした。インドでは、バラモン教が批判され、唯物論、虚無主義、快楽主義、苦行論、不可知論・懐疑主義が横行します。人間の内側（内面）に開かれたアプローチといえます。
中国では儒家、墨家、道家、法家、兵家等、道教をのぞいて他の思想は国家＝人倫に価値を置いた社会思想政治思想でした。人間の外側（外界）に開かれたアプローチといえます。紀元前の世界で、パレスチナ中東ではヤハウェ（唯一神）が、インドでは人間（心）が、中国では国家（政治）がキーワードとして浮かんできました。
科学技術の発展は指数関数的で眼を見張るものがありますが、人が考える幅、感じる幅は 2000 年以上経ってもそう大きな変化はないと感じます。その意味で人間の考える幅、感じる幅を大幅に超えた技術はこの先破滅的結果を及ぼす危険性を感じさせられます。人間の制御不能な欲望が、技術に反映し、制御不能な欲望を持った技術（原水爆・AI）に転化したとも思えます。気候危機や「戦争をしない・させない」は今世紀中に決着が求められる急ぎの課題だと思います。

以上、私の死生観**―日々死を身近に感じつつ、精一杯生きることを考える―**を述べました。入院・療養が続いた半年の生活を通して考えてきたことです。

（参考文献）**my 仏陀**という得手勝手な解釈は原始仏教・東洋哲学の第一人者である故中村元博士の著作、原始仏教研究者佐々木閑氏の講義録からヒントを得てきたものです。今回は詳しくは触れていませんが思想家故吉本隆明氏の著作、また **my イエス**という解釈には原始キリスト教研究者故田川健三氏の著作から影響を受けました。

宮沢賢治の「雨にも負けず」は私の好きな詩ですが、「**丈夫な体**を持ち 欲はなく 決して忿らず いつも静かに笑っている」と印したとき、すでに**結核で命の先がない状態**でした。東に、西に南に北に困っている人の下に駆けつけ寄り添うことは、死を前にした賢治の**見果てぬ夢**でした。詩の終わりには南妙法蓮華経の文字が乱れた字で書きつけられていました。